

飛鳥地域の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1986年度、飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、飛鳥地域において、石神遺跡、水落遺跡、檜隈寺、橘寺など12件の調査を実施した（21頁の別表参照）。以下に主要な調査の概要を報告する。

1. 石神遺跡第6次調査

飛鳥寺旧寺域の西北に位置し、史跡水落遺跡の北に広がる石神遺跡は、いわゆる須弥山石や石人像が発見された場所であり、斉明朝の饗宴施設ではないかという想定で、1981年以来調査を継続している。5回の調査で、斉明朝から藤原宮期におよぶ多数の遺構を確認するとともに、なお広がりを持ち、短期間に多くの変遷があることがわかってきた。その範囲や具体的な性格の解明のため、本年度も第5次調査地に北接する水田で調査を行った。調査区は東西65m、南北14mである。検出した遺構はこれまでと同様に4時期（A期：斉明朝、B期：天武朝、C期：7世紀末、D期：藤原宮期）に大別できる。

A期の遺構 第4次調査で検出した大井戸の存続する時期で、さらに3時期に細分できる。

A-1期 飛鳥寺の北に東西大垣（第3次調査）が造られ、石神遺跡の区画が形成された時期で

ある。大垣の南には水落遺跡がある。石組溝 SD332は調査区東端にある南北開渠で、南面大垣の基壇を潜り北流する溝の延長部である。石組溝 SD900は第4次調査区の北で検出した大井戸 SE800の排水溝となる南北方向の暗渠である。掘立柱建物 SB1090は調査区西南隅にあり、東西4間分、南北1間分を確認した。南と西は調査区外に延び、東はA-2期の石組溝 SD1080の下になるため建物規模は不明であるが、総柱建物と思われる。SB1100と重複し、これより古い。掘立柱建物 SB1110は調査区西北の東西

3 間の建物で、南端 1 間分を確認した。総柱建物と推定される。SX1115はSB1110の西にある石敷で、東西幅1.3m、南北 4 m 余を確認した。なお A-1 期に先行する遺構として、SD900の西の斜行石組溝 SD1030がある。おそらく A-1 期以前の整地土と同時のものとみられるが、構築の時期や性格は明らかでない。

A-2 期 南面の大垣の他は A-1 期の遺構をほとんど廃して全面に整地を施し、大規模な造営を行っており、最も整備された時期である。南北廊 SC820は梁行 1 間 (5 m) の単廊で、梁行 5 間分 (2.5m 等間) を検出した。南端は大垣に取り付くと考えられ、大垣から北 29~33 間目に相当する。30~32 間目の 3 間分は棟通りにも柱が立ち総柱建物 SB1070となる。南北廊の東西両縁には雨落溝 SD790・1080がある。西雨落溝 SD1080は敷石に乱れがあり、改修された可能性もある。SD1080の西に東西棟建物 SB1100がある。身舎梁行が 3 間で、おそらく南面と西面にも庇が付くと考えられ、北側に石敷 SX1105、南側には第 5 次調査で検出した石敷 SX880、東側には SD1080の石敷が東側柱に近接していることから、周囲に石敷のある格式の高い四面庇建物とすることができる。この建物の時期については南北廊上の総柱建物 SB1070との関係や、SD1080の改修の時期とも絡んで、A-3 期に下る可能性も残っている。掘立柱建物 SB980・990はどちらも梁行 2 間、桁行 6 間の同一規模の南北棟建物で、第 5 次調査で検出した東西棟建物 SB860の両端に柱筋を揃えている。SB860・980・990の 3 棟は桁行・梁行とも柱間 2.1m 等間、隣棟間隔も柱間 1 間分でコの字型の整然とした配置をとる。掘立柱建物 SB1000はコの字型の区画内にある桁行 6 間、梁行 2 間の東西棟で、その性格については北側の状況が判明しないと決められない。またこの周囲の 3 棟の建物は廊的な性格も看取される。石組溝 SD890は調査区中央付近の南北暗渠で、大井戸 SE800からの排水溝 SD900に代り西に新設したものである。SD890の東に接

する石敷 SX1045は緩やかに SD890に向かって下降し、蓋石と面を揃えていたらしく、南北廊 SC820と SB990の間は本来全面が石敷で、SD890は大井戸の排水とともに石敷周辺の雨水処理をも担っていたのであろう。

A-3期 比較的小規模な改変である。石組井戸 SE1050は南北廊 SC820の東にあり、長径1.5m、深さ1.5mである。時期を示す遺物がないが、井戸から東へ石組小溝 SD1051があり、暗渠 SD890に接続しているので、同時期に存在したものであろう。石組池 SX1010は建物 SB1000の廃絶後に設けられ、一辺6mの正方形で、深さは80cmある。側壁は川原石を2～3段積み、四隅に立石を据えている。裏込めには粘土と砂質土を版築のように互層に積み、池底には粘土を敷き、その上に小石を敷きつめる。取排水の施設は認められないが、水を蓄えた施設であることは疑いない。ただ長期の湛水を示す堆積層がないことから、常によく管理されていたか、一時

的な使途に供された施設と考えられる。重複関係から建物 SB990より新しい。また池の西から北側にかけては7世紀中頃の整地土が広がるが、北側ではその上に厚さ約10cmの別の整地土があり、池の掘形はこの上面から掘り込まれていた。上層整地土の時期は明瞭でないが、このことから石組池の時期がB期に下る可能性も残っている。

B期の遺構 南面大垣がやや南に作り替えられ、総柱建物が整然と建ち並ぶ時期であるが、今回の調査区内ではこの時期の遺構は少ない。2時期に細分できるが、いずれも第5次調査区以南の遺構と直接つながらないので、今後の調査の結果によっては時期の変更もありうる。

B-1期 掘立柱建物 SB1040は調査区中央からやや西寄り

にある桁行4間以上、梁行1間の南北棟建物である。その西1mを隔てて柱間2間以上の南北塀SA1041、A期の南北廊整地土上面から掘り込んだ6間以上の南北塀SA1060、調査区東辺で確認した南北塀SA986がある。

B-2期 B-1期の塀SA1060と重複し、それより新しい掘立柱建物SB1068がある。桁行・梁行とも1間である。バラス敷きSX1046は調査区中央にあり、暗渠SD890の埋土と石敷SX1045の上面を覆い、建物SB1040の掘形よりも新しい。なお調査区西北部の石敷SX1105の上面にも同様のバラスがあり、同時期かとみられる。

C期の遺構 この時期は、遺構は希薄となり、掘形も小振りになる。調査区東部の掘立柱塀SA751は5間分を検出し、総延長63m(28間分)を確認した。その他にSA751の西約14mにある南北塀SA1020を6間分、調査区南端にある東西塀SA1048を13間分(20m)検出した。

D期の遺構 遺構の方位は北で西に振れる。柱穴、溝埋土ともに炭を含み、C期の遺構と酷似する。調査区東方にある2条の南北溝SD621・640は溝心々で13.5mを隔てて平行する。どちらも幅2m、深さ30~40cmで、南は第3次調査区まで延びて東に折れる。道路の両側溝かと考えられる。SD640の西に隣接する掘立柱南北棟建物SB863は桁行7間、梁行2間である。掘立柱塀SA781は調査区中央にある南北塀で、5間分を検出した。南は第4次調査区まで延びて西に折れる。掘形も大きく、C期の重要な区画であろう。その区画内とみられる西側に掘立柱建物SB1038・1095がある。桁行3間以上、梁行2間で、梁行長はSB863と同一の4mである。総柱建物SB1085・1086は同位置で建て替えられているが、重複がなく前後関係は不明である。他に南北塀SA1087があり、3間分を確認した。

出土遺物 B~Dがあり、石敷面を伴うなど重要施設と考えられ、石神遺跡の中核をなす建物の可能性もある。このように石神遺跡は広大な範囲の様々な区画から構成されているが、その性格の具体的な解明にはなお調査が必要である。

まとめ 今回の調査で判明した最も顕著なことは、斉明朝に、南面大垣を外郭とする北側をさらに南北廊によって分け、その東側には東西棟建物を中央にして周囲を廊状の建物で囲った、宮殿・官衙とも異なる特異な殿舎配置の存在が判明したことである。その性格についてはさらに北側の調査を待たねばならないが、石神遺跡の斉明朝における重要な施設の一つであることは疑いなかろう。また南北廊に設けられた総柱建物SB1070の中心は南面大垣の北約75mに位置するが、その位置は計画的に設定されたと考えられ、今後遺跡の範囲を知る手掛かりとなろう。さらに南北廊の西側にも四面庇建物があり、石敷面を伴うなど重要施設と考えられ、石神遺跡の中核をなす建物の可能性もある。このように石神遺跡は広大な範囲の様々な区画から構成されているが、その性格の具体的な解明にはなお調査が必要である。

2. 水落遺跡第6次調査

遺跡の一層の解明と史跡整備の資料を得るため、漏刻台建物の南にある掘立柱建物の南側で小規模な調査を行った。1984年度実施の第4次調査では東西棟建物の南2.2mの位置で漏刻台建

物に伴う掘込地業の南端を確認し、さらにその南2mで東西に並ぶ3個の柱穴を検出した。東西塀であろうと推定されたが、今回その確認のため第4次調査地と一部重複する東西15m、南北3mの範囲を調査した。検出した主な遺構は、東西塀1、東西溝1である。東西塀は第4次調査と合わせ8間分(18.3m)を確認した。柱掘形は一辺1.2mの方形で、深さ1.4m、柱はいずれも南方向へ抜き取られていた。柱掘形は、前述の掘込み地業上を覆う整地土と一連とみられる土層上から掘り込まれており、この東西塀が北側の中心遺構群と一体のものであることがわかる。東西溝は幅0.8m、深さ0.4mの断面U字形の素掘り溝である。東西塀の廃絶後に掘られたものである。水落遺跡の北限は石神遺跡第3次調査で検出した東西大垣SA600とみている。

水落遺跡第6次調査遺構図

今回検出した東西塀はやや小規模で、柱間寸法も狭いが、水落遺跡全体に及ぶ掘込地業の南縁のすぐ南にあるので、遺跡の南限施設である可能性がある。その場合、遺跡の南北長は約65mとなる。

3. 檜隈寺第5次調査

檜隈寺はこれまでの調査の結果、7世紀後半から8世紀初頭にかけて建てられた金堂・西門・回廊・塔・講堂などの主要堂塔を確認し、伽藍配置は他に例をみない特異なものであることが判明している。今回の調査は寺域確認と今後の保存活用の資料を得るために行ったもので、講堂の西北方に東西15m、南北38mの調査区を設けたほか、小規模な調査区を4カ所設けた。

遺構は2時期に大別できる。Ⅰ期(10世紀末～11世紀)は土坑5、小穴2がある。土坑には炭・焼土が多量に入り、土器(黒色土器、緑釉・灰釉陶器を含む)・瓦・銅製針状製品が出土した。Ⅱ期(12世紀後半)は大規模な削平を行っており、土坑5と小穴、多数の小溝がある。小溝は水田あるいは畑地の耕作に関連するものとみられ、この時期には耕地化していることが知られる。遺物では、Ⅱ期の小溝から出土した金銅製の飛天断片が特に注目される。これは金銅仏の舟形光背右側の周縁に取りつけられた奏楽

檜隈寺出土金銅製飛天断片

飛天と考えられ、鋳銅製で鍍金がよく残る。類例としては法隆寺献納宝物の甲寅年銘光背（推古2年・594）があるが、それより造作・表現とも丁寧である。様式から判断して北魏後半期の製作とみられ、甲寅年銘光背より古い遺例と考えられる。渡来系氏族である東漢氏の氏寺にふさわしい遺物といえる。調査の結果、檜隈寺に関する顕著な遺構は確認できなかったが、Ⅰ期の土坑は寺の生活に関連したゴミ捨て穴と考えられ、耕地化以前には檜隈寺の何らかの施設が付近に存在した可能性は大きい。

4. 橘寺1986—1次調査

明日香村大字橘にある橘寺の北西約170mに位置する川原

檜隈寺調査位置図

寺との旧境界と考えられる里道の南側で行った調査である。調査地は東西2カ所に分れる。遺構は大別してⅠ期（7世紀後半）・Ⅱ期（8世紀中頃）・Ⅲ期（中世）の3時期に区分できる。Ⅰ期は東西掘立柱塼SA01とその北雨落溝SD02で、SA01は東区2間分、西区で1間分を確認し、15間分が復原できる。SD02は塼心から3m北にある素掘り溝である。Ⅱ期には土坑SK05がある。東西4.5m、南北3.5m、深さ1.5mで、炭灰や礫を多量に含む黒灰色土と、木材片や木葉を大量に含む茶褐色土が堆積しており、一度に埋められたらしい。土器・瓦・材木片・木簡・薪の燃えさし・鉄鎌などの金属製品・獣骨等が出土し、造営工事の廃材や塵芥を投棄したゴミ捨て穴と推定される。この土坑やⅡ期築地層から出土した瓦は川原寺創建瓦を含む7世紀後半のもの、土器は藤原宮期から奈良時代中頃のものである。木簡は9点出土し、「煮凝」「……魚煮一連上」の付札や、「香川郡□□郷」と読める郡郷制下のものとみられる荷札、人物戯画等がある。Ⅲ期はSA01から5m北に設けられた築地塼SA03とその北雨落溝SD04、土坑SK10等である。SA03は基底部幅3m、残存高約0.5mで、築地本体は削平されていた。SD04は築地の北2mにあり、深さ1.2m、復原幅2mで、鎌倉時代から室町時代初期の土器・瓦が大量に出土した。この築地

は以前確認している橘寺北限の築地塀の西延長部で、今回北門心から154m分確認したことになり、さらに西に延びる。築地基底部出土の遺物からみて、前身の築地があったとしても8世紀中頃以前にはさかのほりえない。それ以前は南の東西塀が北限施設であった可能性が生じてくる。これらの塀や築地は川原寺の伽藍方位に一致し、遺物の上でも同寺と共通するものが多いから、古代においては橘寺の北面は川原寺の強い影響下にあったと考えられる。（加藤 優）

橘寺調査遺構図

橘寺調査位置図